

## 世界遺産アカデミー認定講師 File No.32

このコーナーでは、世界遺産アカデミーの啓発活動にご支援いただいている世界遺産アカデミー認定講師の方に毎回スポットを当てて、お話を伺います。第32回目の今回は、これまでに70カ国も訪れられた旅行好き、絵画、世界史、建築と多趣味で、世界遺産クラブ(WHC)の運営委員としても活躍されている、WHA賛助会員の西脇英子(にしわき・えいこ)さんです。

### ——世界を公平に訪れたい

世界遺産を勉強していて一番良かったと思うのは、世界史や建築、絵画、宗教にまで勉強の幅を広げられたことです。WHA認定講師として、これまでに東京立正短期大学や亜細亜大学などの学生にガイダンスしてきましたが、彼らは若くして世界遺産の素晴らしさを早くから知ることができて、羨ましく思います。予備知識のない「純粋な眼」で観るのも、勉強した“大人の眼”で観るのも、どちらも良さがありますが、世界遺産を勉強してから旅行に行くと、より充実した体験が得られます。私にとってはこの幸せを分かち合える人たちと巡り合えたことも、ありがたいことでした。

せんが、やはりこの目で見て実感したいと思うのです。また、旅先で現地の方たちのお話を訊くのも、面白いものです。「信仰する宗教は何ですか」という質問は、直接的過ぎますが、話を進めていくと、この人



音楽が聞こえてきそうな、寺院の屋根のフォルム  
ラオスは大好きな国のひとつです

ど、世界最大級の鍾乳洞があります。『イエローストーン国立公園』もそうですが、地球の歴史の壮大さに、心が震えます。世界遺産ではありませんが、ユタ州からアリゾナ州にかけて広がる『モニュメント・バレー』は訪れてみたいです。『エルサレムの旧市街とその城壁群』と、最初の世界遺産12件のひとつ、エチオピア連邦民主共和国の『ラリベラの岩の聖堂群』も惹かれる場所で、ラリベラの岩窟教会は、最初に感動した世界遺産です。資材がなく、何も無い土地でも、掘り続けていけば、いつかできる。信仰心の力強さが伝わってきます。ポーランド共和国の『ヴィエリチカとポフニャの王立岩塩坑』の地下教会も同様で、信仰への祈りを感じずにはられません。日本の世界遺産には、切迫した状況で造

最初に訪れた外国は、韓国でした。新聞学科所属の大学時代、当時の韓国は、「言論の自由」を巡って、新聞・出版各社が政府から弾圧を受けていました。国民たちは政府に反発し、東亜日報に広告を出して、訴えたのです。東亜日報社で記念写真を撮りたいほど熱の高まった気持ちでしたが、KCIAという弾圧組織が私たちを見張り追いかけてきて、危険な旅でもありました。この大学時代の異質なジャーナリズム体験が、世界に目を向けた発端かもしれません。在るがまま自ら確認することを重視して、阪神・淡路大震災や東日本大震災の被災地も訪れました。テレビで報道された映像と自分の目で見た被災地の状況は、まったく異なります。一方、最近では高画質なTVに映

がどのような宗教と触れ合っているのか感覚的に分かってきて、キリスト教の方には「仏教徒の友達はいますか?」、仏教の方には「キリスト教の友達はいますか?」と訊いてみます。隣の国への好き嫌いを投げかけてみることもあります。メキシコのレストランで店員に「どうしてパエリアが無いのですか?」と訊くと、「スペイン人が嫌いだから」との答え。世界の国々にはそれぞれ複雑な歴史や意識、習慣があり、そういったことにじかに触れることができるのも楽しみです。外の世界を覗きたい、すべての世界の国々を公平に訪れたい気持ちになるのです。

られた“哀しみの世界遺産”が、少ないように思います。その姿が哀しみを体現している「原爆ドーム」はありますが……。『石見銀山』にしても、銀を掘り続ける苦勞より、町全体が銀生産で発展した良い側面が強調されています。今回の「潜伏キリシタン」の教会によって、日本に初めて「哀しみの世界遺産」が誕生しました。従来の視点を変える、新しい世界遺産ではないでしょうか。長崎には“置の教会”もあり、いかにその集落の方々の生活の中にキリスト教が浸透していたかを感じることができません。口伝で伝わっている祈りの言葉(オラショ)にも不思議な魅力が感じられます。本職(メディア関係)で仕事柄、セミナーや講座をゼロから作ってきた経験を活かして、世界遺産を通じて人を感動させるこ

し出される観光風景にあえて現地になくてもいいのでは、という声も囁かれます。以前、マチュ・ピチュ旅行から帰国後、ある人から、「テレビで観る方がきれいなんじゃない?」と心無いことも言われました。現地を訪れても、すべてを語ることはできま



マチュ・ピチュは、インカの人々に「思いを馳せる」場所

### ——心揺さぶられる、 信仰と哀しみの世界遺産

印象に残っている世界遺産として、スロベニア共和国の自然遺産『シュコツィアンの洞窟群』には圧倒されました。探検ツアーでは、明かりが並んだ通路を下っていきます。暫くすると、高さもあるホールのような広いところに出て、突然、明かりが全部消されて、視界の閉ざされた暗闇世界に。滝や川の水の音が反響し合い、空間を包み込みます。撮影禁止だったので記録に残せてはいないのですが、今まで見た風景の中で断然の第一位です。アメリカ合衆国にも、『カールスバッド洞窟群国立公園』、『マンモス・ケープ国立公園』な

とのできる、誰かの人生に一石を投げられる、そんな認定講師を目指したいと思っています。世界遺産を感じる時に大切なことは、そこにいた人々やそれを築き上げた努力に、どれだけ“思いを馳せられるか”です。時代背景や登録理由を学び、思いやりや優しさを培っていくことが必要だと思います。



厳島神社ではカヌーで鳥居に近づきました